

災害ボランティアの最前線を見据えた防災計画

渥美 公秀¹

¹大阪大学准教授 コミュニケーションデザイン・センター
(〒565-0826 大阪府吹田市千里万博公園 1-1)
E-mail: atsumi@hus.osaka-u.ac.jp

「ボランティア元年」と呼ばれた 1995 年阪神・淡路大震災の救援活動において、「現実への逃避」として始まった災害ボランティア活動は、空間的・時間的に活動を拡大しつつ、秩序化へのドライブを 2 度経験してきた。その結果、災害ボランティア活動は、意外にも、「被災者抜きの救援」に落ちてしまいそうであった。しかし、最近頻発している災害において、いわば、行き着くところまで行っていた災害ボランティア活動は、反転し、原点へと回帰しつつある。これからの防災計画においては、災害ボランティアの動向を踏まえ、「誰が誰の生をコントロールするのか」という原点を確認し、新しい社会の構築という意味での災害復興をも射程に入れた思考が求められるだろう。

本研究では、まず、災害ボランティア活動の約 14 年を秩序化へのドライブを経た原点回帰として描写する。次に、災害ボランティアの最前線における活動を活写する。具体的には、能登半島地震を契機とした足湯活動と中越沖地震を契機とし岩手・宮城内陸地震へと引き継がれている寄り添い活動である。さらに、ある復興過程において被災者から被災者へと出された手紙が象徴的な意味を示していることを事例として参照する。以上の検討をもとに、災害ボランティアの最前線を示すキーワードとして「接触 touch, encounter, contact」と「感情 affect」を抽出する。最後に、これらのキーワードを見据えた防災計画について考察する。

キーワード：足湯、寄り添い、手紙、感情、災害ボランティア、復興